歴史地理学からみたカナダ日本人移民史研究とその課題
――漁業移民から「水産移民」へ――

河　原　典　史

Ⅰ．はじめに

第二次世界大戦以前、多くの日本人が海を渡った。その場合、第一に日本の勢力圏であった植民地、いわゆる「外地」への移動がある。前者は朝鮮と台湾をはじめ、樺太や満州などがあてはまり、移住する人びとは殖民と記されることも多い。第一次世界大戦後にドイツから委任統治領となった南洋諸島も、これに含まれる。次に、日本の勢力の及ばない諸地域への移動がある。ハワイ、アメリカやブラジルなどの移住がこれに該当する。さらに、その中間にあたるフィリピンへの移住も忘れてはならない。いずれの地域においても、農業に関わる移民が多かった。

このような日本人移民（殖民）研究は多岐にわたる。それらの学術的な研究について展望したものとして、阪田[1]や神[2]などの報告があげられる。移民研究者による学際的研究団体である移民研究会[3]や日本移民学会[4]も、その研究動向をまとめている。後者による編著[5]には、近年の研究成果が記されている。

本稿では日本における日本人移民史研究、とくに歴史地理学からのレビューのなかで漁業、あるいは水産業をめぐる移民史研究の特徴について考察する。漁業・水産地理学のアプローチが隣接科学の移民史研究にいかに貢献しうるか、本稿で検討する。

Ⅱ．カナダ日本人移民史研究の課題

1　歴史地理学研究のアプローチ

さまざまな社会・経済的要素が複雑にからんで、多くの日本人は海を渡った。ハワイや、アメリカ、ブラジルなど南北アメリカ大陸への日本人移民に関しては、歴史地理学からの研究もみられる。先駆的な研究として角井[6]は世界各地の移民、そして日本人の移住について紹介している。本格的な研究は、第二次世界大戦後を待たねばならない。代表的なものとしてアメリカ西岸における花卉栽培に関する矢ケ崎[7]、沖縄県を中心とする南アメリカへの移住をまとめた石川[8]、アメリカ北西岸の都市域における日本人集住地を考察した杉浦[9]などがあげられる。ハワイについては、農業だけでなく瀬戸内からの移民が漁業に携わった史実を飯田[10]が明らかにしている。その他、歴史学や社会学からのアプローチも検討されねばならない[11]。

日本人移民史研究では、耕地が少なく資源の乏しい日本の経済的な困窮が指摘されてきた。度重なる災害や飢饉など、農業生産の低下も移民を輩出させた。ただし、いつ・どの地域へ移民が渡ったかについては、当該地域での移住要因の発生時期、ならびに移住先における労働力の需要が検討される。それらの輩出（push）・受容（pull）要因に関わる諸制度の整備、ならびに先駆的移民によ

る経験談などの情報伝達も見逃せない[12]。多くの先行研究では、渡航先の農業に関わる移民が対象であった。そして、近年の研究では、移民は移住・定着・同化というプロセスを経ることが自明のようになりつつある。そこでは、農業に携わる移民は農地を拡大し、やがて都市へと展開する史実が明らかにされてきた。しかし、それは生産空間を農地とする農業移民に限定したアプローチに過ぎない。

すなわち、陸上を居住空間としつつも、海上の一部を生産空間である漁場として認識し、その発見・拡大、時には縮小・消失によって移動をくり返す漁業者の場合には、移民史研究においても異なった視点からの検討が不可欠である。さらに、腐敗性の高い魚類を扱う漁業は、漁撈だけでなく保存・加工・流通などの関連産業と密接に関わる。また、日本の出身地（送出地）と海外の移住先（受容地）における生業との関係についても検討すべきである。渡航先で漁撈に関わるには、農村・都市出身者にとっては大きなハードルになると思われる。

このような研究の枠組みや、その視点の再検討を試みる場合、2002年の歴史地理学会45回大会のシンポジウム「移民・殖民の歴史地理」が指標となる。そこでの議論がまとめられた翌年の『歴史地理学』45巻第1号には、極めて重要な論考が収められている[13]。注目すべきは、「コメント」の論考である。植民地の移住に関する歴史学者の木村[14]は、外地以外への移住との統合的な研究を地理学に期待している。歴史地理学の時空間的分析の重要性を説くとともに、山下[15]と久武[16]は他民族との関係性へのアプローチを説いている。ただし、登壇者（執筆者）と総括の杉浦[17]も、農業と都市域における生業への移民史が念頭にあるのか、漁業に関する移住はほとんどふれていない。改めて、漁業とその関連産業について、植民地だけでなく各地の事例研究について、総合的に移民史研究を考えねばならないのである。

2　カナダ日本人移民と生業

カナダへ渡った和歌山県出身者には、「江州ソーミル、熊本ヤマ、死ぬよりましかなへレン獲り」という俗語が残っている。つまり、滋賀県（近江国）出身者は製材所（sawmill）に勤め、やがて日本人を顧客とする商業へと転じた。熊本県出身者の多くは契約移民として伐木業、炭鉱業や鉄道保線工などの山地部で就業した。それに対し、日高郡三尾を中心とする和歌山県出身者は、ニシン（鰊・鯡）（herring）やサケを獲る漁業に就く方が倒木、落盤や雪崩で落命するより安全だと揶揄したのである。ただし、春～秋期のサケ漁の後、翌春までの冷たい海でニシンを追う和歌山県出身者も厳しい環境に置かれていたに違いない[18]。

このようなカナダ日本人移民史の先行研究を整理してみよう。先駆的なものとして、カナダ日本人移民を輩出した和歌山県三尾村とその受容地であるスティーブストンを紹介した福武[19]と鶴見[20]の業績をあげねばならない。さらに、外交資料から検討した飯野[21]、現地での日本語新聞や住所氏名録など日本語資料の発掘と、それを駆使した新保[22]や佐々木[23]があげられる。末永[24]は近江商人という視点から、バンクーバーにおける日本人の商業活動を論じている。それらのなかで、歴史地理学から輩出地の滋賀県東部の地域性、すなわち愛知川水害と小作人の渡加との関係を論じた谷岡[25]の研究は看過できない。そして、日本人漁業者の集住地・スティーブストンのフィールドワークをまとめた山田[26]の研究は重要である。また、カナダの水産業について主要な魚種と民族との関わりについて論じた大島の研究[27]も見逃せない。なお、和歌山県からはカナダ以外でもハワイ、アメリカやオーストラリアなどで漁業に就く移民が少なくなかった。それらについても、岩崎[28]や久

原[29]、近年では今野[30]が研究を重ねている。

個別論文だけでなく、海外移民の輩出地では、その研究が自治体史で取りあげられることも少なくない。いわゆる移民県と呼ばれる自治体では、移民・移住に特化した自治体史もみられる。その代表的なものが『和歌山県移民史』[31]と『美浜町史』[32]、『カナダ美浜町百年史』[33]、他県では『彦根市史』[34]や『広島県海外移住史』[35]などがある。また、海外移住資料館のプロジェクトとして、移民に関する記述のある自治体史を網羅的に整理した報告がある。九州四県、鹿児島や愛媛県など西日本を中心とするこれらの報告は、移民輩出地の基礎的なデータとして重要である[36]。ただし、それらによれば、カナダ日本人移民に関する研究は少なく、拙稿で詳述した鹿児島県[37]については、先行研究がほとんどない。さらに、いわゆる郷土史家による業績も看過できない。地道な資料発掘や聞き取り調査による史実の解明は、研究者の成果に勝るとも劣らない[38]。

筆者は、第二次世界大戦以前におけるカナダ日本人移民史の特徴である漁業移民史研究について、近年における北米での研究成果をレビューした[39]。ただし、いわゆる農業移民や都市移民に対する漁業移民との比較検討については、必ずしも説明できていない。本稿では、これまで充分に考察されてきたとは言いがたい海外で漁業に従事した日本人移民について、その研究視点・方法について考察したい。朝鮮[40]や南洋諸島[41]などの外地への漁業移民とは異なる北米への漁業移民の諸相について、さまざまな視点から検討する。その際、ハワイ[42]やアメリカ[43]、さらにオセアニア[44]との比較からカナダ日本人移民の先行研究を整理する必要がある[45]。

その場合、多岐にわたる関連産業に展開する漁業の特殊性から、サケ缶詰産業を中心とするカナダ水産界に関わった日本人移民について、筆者は「漁業移民」の表記に疑問を呈してきた。捕鯨業[46]や水産加工業[47]、ならびに造船業[48]を含めた「水産業」をめぐるカナダ日本人「水産移民史」研究の構築を提起してきたのである[49]。

3 個人史へのアプローチ

地理学では、空間スケールを考え、そこで営まれる人間活動にアプローチする。しかし、移民史研究においては個人に焦点をあてることに対して慎重である。その理由として、官約・契約移民では、その多くが農業移民としての集団移住であることが大きい。個人を看過し、指導者が注目され、募集の過程や渡航後の農地開発が分析の中心になるからである[50]。また、いわゆる先駆者に関する賞讃的な研究になる個人史研究は、一般的かつ総合的な考察へと昇化しにくいため研究者は慎重になるのであろう[51]。

漁業に就いたカナダ日本人移民は、地縁・血縁関係を中心とする連鎖移住による和歌山県出身の自由移民が多かった。そうすると、カナダ漁業における日本人移民史については、個人活動に注目すべきである。漁場の盛衰による移動性の高い漁業者は、個人も移動することが多い。何よりも、カナダへの移民の特徴であるサケ缶詰産業に携わる漁業者をみるとき、属性やそれらによる漁獲高・量の差異、漁撈技術をめぐる同業からの独立などは、個人レベルでの分析が不可欠である。かかる個人レベルでのヒトに焦点をあてる研究は、漁場の利用形態に関する文化地理学的研究を推進してきた田和が指摘している[52]。

そうすると、農地の拡大や都市への展開という農業移民史とは異なる視点をふまえ、渡航先における個人レベルでの移動に関する考察が必要となる。近年の歴史地理学においてそれを試みている花木は、外務省史料の精査から日本人移民のアメリカ西海岸における農業移民個別の移動を復原し

ている[53]。同様に、フィリピンへの農業移民を考察している鈴木[54]の資料の活用方法は、個人史を検討する筆者の漁業史研究に通じる。つまり、個人レベルでの移住について、歴史地理学研究は渡航先での移動歴を考察することにまで発展しつつある。

Ⅲ．漁場利用と漁業補助空間

漁業に関する移住は、農業と異なる諸相を示す。それは、漁業の特殊性による。さまざまな人間活動が研究対象となる地理学では、空間と時間との重なりから地域の様子を考察することに特徴がある。この２つの視点は、テーマに合わせてスケール（尺度）を変えて分析される。

空間とそのスケールについて小縮尺、つまり広域から順に大縮尺の狭域に焦点を移していく方法を例示すると、大陸＞国＞地方＞都道府県＞郡＞市町村というスケールの関係が成り立つ。ただし、明治行政村をめぐる検討は重要である。明治行政村とは、明治 22（1889）年に近世の藩政村、いわゆる集落（ムラ・大字）が明治政府により整理・合併された行政単位である。そして、血縁関係者の集合体であるイエ、それを構成する個人、つまりヒトへとスケールは小さくなる。先駆者の出現をはじめ、移民の送出やその後の連鎖移住を惹起する要因になるため、イエやヒトは重要な分析単位となる。都道府県レベルでの移民の進出に留まる地理学以外の移民史研究には、かかる視点が希薄なのである。

海上での漁撈が漁業の主たる活動であることは自明である。しかし、出漁準備、魚獲物の水揚作業や加工、漁具の管理などは陸上で行われることがほとんどである。厳密にいえば海上になるが、漁船の繋留場所も漁業活動においてきわめて重要である。漁場と同様、これらは漁村を構成する空間として決して等閑視できない漁業補助空間と位置付けられる[55]。後述するように、潮流や潮汐などと密接する漁場の利用形態は陸上、とくに漁業補助空間にも連動しているのである。このような漁村空間の構成は居住空間だけでなく、とりわけ漁業補助空間は営まれる漁業種類によって異なる。また、構成要素の時系列的な変化を指標に漁業の盛衰過程を追うことも可能である[56]。そして、新たな漁場を求めた移動、腐敗性の高い魚介物を扱うために、保存・加工・流通など他の産業との連関や転業が生じる。とりわけ造船業について、家大工とは異なる特別な技術を有する船大工は看過できない。そして、これらの空間利用とその変化を分析するにあたり、火災保険図をはじめとする大縮尺図が活用されるのである[57]。このような漁業をめぐる特性は、これまでのカナダ日本人移民史研究では看過されてきたのである。

陸上と海上の２つの空間を有機的に考察することは、1980 年代の地理学や漁業史学に大きな変革をもたらした[58]。この視点は海外への漁業移住先においても重要である。つまり、農業移民の農地の利用やその拡大とは異なり、視覚的に把握しがたい漁場利用について移住先においても考えねばならない。日本人移民史研究において、この視点の欠落を松本は厳しく指摘している[59]。農業とは異なるアプローチが、漁業をめぐる移民史研究には必要なのである。

移住先における漁場の適応性について、送出地（出身地）での生業に留意しなければならない。多くが農業に従事していた日本人移民は、移住先においてもサトウキビ・花卉・綿花・コーヒー豆栽培などの農業に就いた。また、鉱夫や鉄道保線工などの単純な肉体労働に関わる場合でも、特別な技能は必要なかった。それらに対し、漁業に関わる移住の場合、海上での漁撈に携わるには、漁獲

以前に漁船への乗船そのものが漁村以外の出身者にとっては未知の体験であろう。つまり、カナダでサケ缶詰産業に従事し、サケ漁に携わるにあたって出身地の生業へのアプローチは極めて重要である。滋賀県をはじめ、非漁村出身者もサケ缶詰産業に従事したにもかかわらず、先行研究では都道府県や郡単位での分析にとどまっていた。そのため、テーマに応じて・ムラ・イエ・ヒトへと空間スケールを臨機応変に変え、そこでの生業が移住後にどのように関わるのかを検討する地理学アプローチが重要なのである。

もうひとつは、時間スケールを考えることである。空間スケールと同様の表現をするならば、それは、歴史的変化＞年周性（季節性）＞月周性＞日周性の順になる。歴史的変化とは、比較的長期間の変化に着目するため、漁業制度の変化や技術革新などが対象となる。年周制では、繁忙期や閑散期などの季節的な漁期の有無と、それらへの漁業者の対応が検討される。さらに、ミクロなタイムスケールとなる月周性と日周性については、漁業･漁村地理学の特徴的な考え方である。つまり、潮流や潮汐、そして月齢や日照は海上における漁業者の漁撈活動と密接に関係するからである。それまでの経済的な視点だけでなく、このような生態人類学的アプローチから漁場の利用形態について、文化地理学から考察を加えた田和の業績は極めて大きい[60]。

筆者は、移住先の海外で漁業に従事した日本人について歴史地理学から検討し、漁業者をめぐる総合的なアプローチをカナダ日本人移民史に適応させる試みを行ってきた。そこでは、春～秋季におけるサケ漁と捕鯨業、そして秋～春季のニシン漁との季節性的な労働力の補完関係が読み説かれる。そして、それぞれの漁業において日周性を考えた漁場利用を考察するのである。

Ⅳ．資料の活用と研究方法

1　農商務省による報告書の活用

農業移民とは異なる漁業移民、さらに関連産業も視野に入れたカナダ「水産移民」史の検討は、漁業地理学の研究史の発展性を考えると、個人レベルからの漁場利用をふまえた総合的な地域史の読解になる。かかる点を考察するために、筆者は有益な資料類の地理学的活用法を検討してきた。その際、前述した火災保険図の他、各種の日記や報告書が活用されてきた[61]。また、個人レベルでの検討においてオーラルデータが重要であるが、その資料的限界についても検討した[62]。本章では、これまで充分に検討できなかった漁場利用を把握できる文字資料について、改めて考察する。

移民史の先行研究では、外務省に関わる行政文書が活用されてきた。しかし、漁業のような生業については、専門的な技術者が記した報告書から学ぶことも多い。1882 年に設立された大日本水産会は、同年に『大日本水産会報』を創刊した。1916（大正 5）年に『水産界』と改称されたこの会誌には、日本国内だけでなく海外における水産業の視察報告が数多く掲載されてきた。これらには、カナダを視察した 技術者による漁場利用の解説や、漁具の図解なども掲載されている[63]。とくに特定の漁業種類や魚種に関する報告書では、より詳細な記述があふれている。農商務省が調査・収集した『海外ニ於ケル本邦人ノ漁業状況』[64] や『加奈陀太平洋岸鰊・大鮭漁業調査報告』[65] などは、その代表的なものである。これからは、行政文書だけでは判明できない日本人を含めた漁業者の生業が読みとれる。これまでのカナダ日本人移民史研究で看過されてきた水産報告書の精査は、極めて重要である。

2　日記・手記の活用

第二次世界大戦前におけるカナダ日本人漁業者の活動を明らかにする資料として、体験者の日記があげられる。伝記・自伝・日記類に描かれたライフヒストリーは、研究者には看過されていた諸点が新たに発見される可能性を秘めている。とりわけ、漁業者の体験に基づく漁場利用は極めて貴重な資料となる。

和歌山県串本町の個人宅には、当時のカナダ日本人移民に関する古写真、手紙やメモ類の他、さまざまな機関が発行した賞状や書類など約 630 点の資料が保存されている。筆者はこれらの『前川家コレクション』[66] を整理し、研究に活用してきた。特に、前川佐一郎（1915 ～ 2005 年）が実父・勘蔵（1882 ～ 1978 年）の渡加やその後の様子を記した手記『無名の勇士』を精読すると、当時のサケ漁業に関する漁場利用が読みとれる[67]。

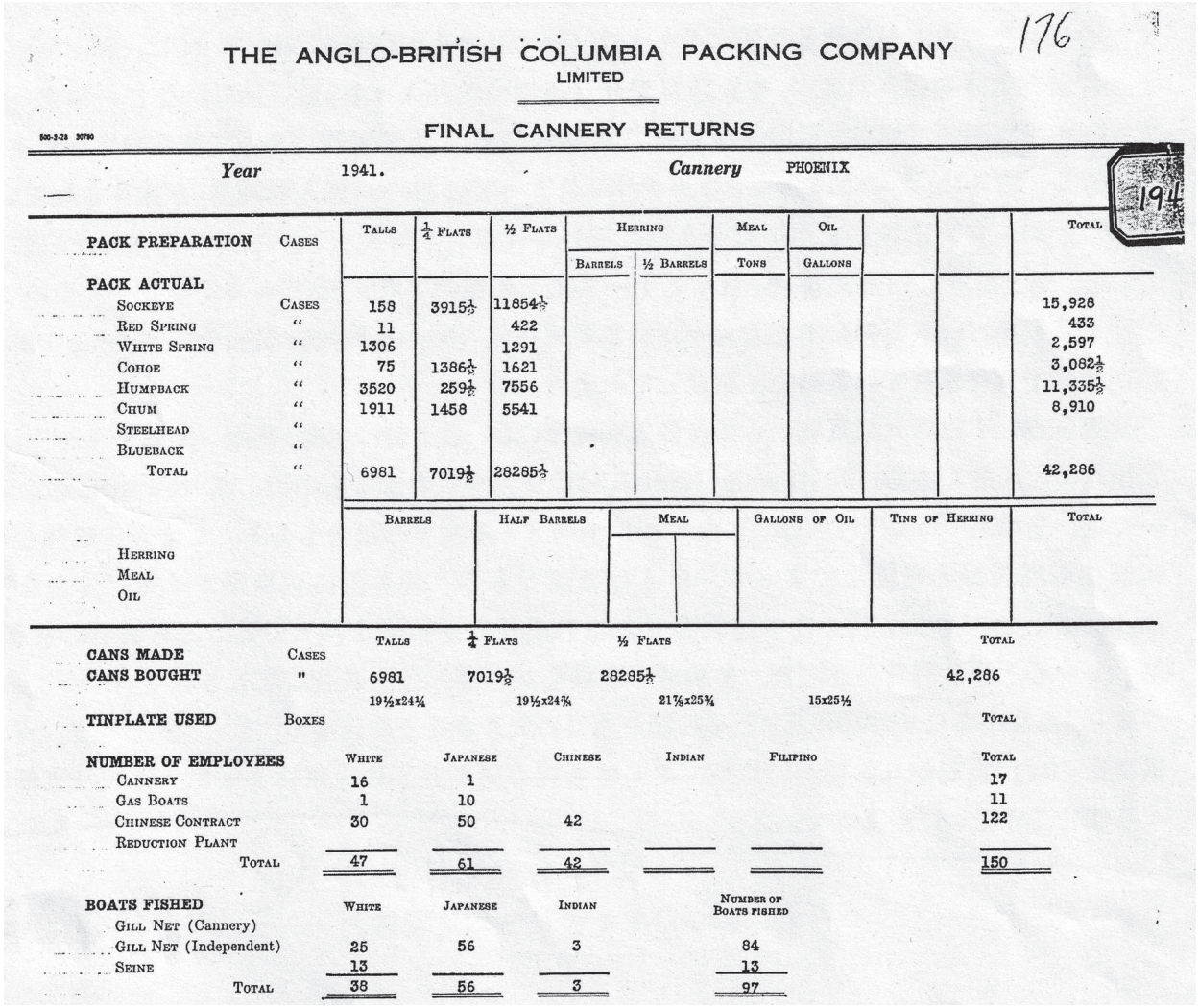
生物学者であり、後に政界へ転進した山本宣治（1889 ～ 1929 年）[68] は、青年期のカナダ滞在時に日記を書き綴っている。1889（明治 22）年 5 月 28 日に京都市新京極でアクセリー店を営む山本亀松・多年の一人息子として生まれた山本は、病弱のため神戸第一中学校を中退後、宇治川畔の別荘（後の料理旅館「花やしき浮舟園」）で園芸に親しんだ。1906（明治 39）年、大隈重信邸での園芸見習を経て、遠戚にあたる眼科医・石原明之助（京都市出身）に誘われた彼は、1907（明治 40）年に園芸研究のためカナダへ渡った。5 年にわたってハウスボーイ、園芸やサケ漁業などに従事した後、1911（明治 44）年に山本は父の病気のため帰国した。そして、旧制第三高等学校や東京帝国大学で動物学を学んだ後、政治家として活躍した山本は、1929（昭和 4）年 3 月 5 日に暗殺された。この通称「山宣日記」[69] によれば、渡加から約 2 年間、ハウスボーイやガーディナーなどに就いた後、彼は 1909（明治 42）年 7 月 1 日～ 8 月 25 日までスティーブストンでサケ刺網業に従事した。この日記は後に社会主義思想家としての山本の苦悩を読み取ることばかりに傾斜されてきたが、後の生物学者の片鱗を窺わせるような漁場利用についての的確な記述がある[70]。

3　Returns（報告書）の活用

“Plans of Salmon Canneries in British Columbia together with Inspection Reports on Each, 1924（『BC 州サケ缶詰工場図集成』以下、『工場図集成』）” は、20 世紀初頭におけるカナダ西岸のサケ缶詰工場の諸相を記している。ただし、各項目に資料的限界があり、サケ缶詰の種類と製造数が別途に記され、種類別の製造数を知ることができない。また、どのような出身国・民族が従事していたかの記載もあるものの、その実数はわからず、彼らの職種も不明である[71]。

このような資料的限界を解決するため、バンクーバー市文書館（Vancouver City Archives）に所蔵され、水産缶詰会社がサケ缶詰工場（キャナリー）ごとに調査・作成された Returns（帳簿）が活用できる[72]。アングロ・ブリティッシュ・コロンビア缶詰会社が経営するキャナリー（缶詰製造所）のうち、フレーザー川河口のスティーブストンにあったフェニキス・キャナリーのものを提示してみよう（第 1 図）。

最上段に社名が記されたこの資料には、続いて調査・作成年とキャナリー名が記されている。その下方の表では、行（縦）にサケ缶詰の魚種、列（横）にそのサイズの記入欄がある。空欄になっているもののニシン、魚肉や魚油の記載欄が印刷済みであることから、他年や他の系列のキャナリーではそれらも製造されたのであろう。下段には業種毎の出身国・民族別従事者数など、より具体的な生産構造の記載がある。白人（White）・日本人（Japanese）・中国人（Chinese）・インディアン



THE ANGLO-BRITISH COLUMBIA PACKING COMPANY
LIMITED

176

500-3-28 30790

FINAL CANNERY RETURNS

194

Year 1941.　　Cannery PHOENIX

PACK PREPARATION	Cases	Talls	¼ Flats	½ Flats	Herring: Barrels	Herring: ½ Barrels	Meal: Tons	Oil: Gallons			Total
PACK ACTUAL											
Sockeye	Cases	158	3915½	11854½							15,928
Red Spring	"	11		422							433
White Spring	"	1306		1291							2,597
Coho	"	75	1386½	1621							3,082½
Humpback	"	3520	259½	7556							11,335½
Chum	"	1911	1458	5541							8,910
Steelhead	"										
Blueback	"										
Total	"	6981	7019½	28285½							42,286

	Barrels	Half Barrels	Meal	Gallons of Oil	Tins of Herring	Total
Herring						
Meal						
Oil						

		Talls	¼ Flats	½ Flats	Total
CANS MADE	Cases				
CANS BOUGHT	"	6981	7019½	28285½	42,286
		19½x24¼	19½x24¾	21⅞x25¾	15x25½
TINPLATE USED	Boxes				Total

NUMBER OF EMPLOYEES	White	Japanese	Chinese	Indian	Filipino	Total
Cannery	16	1				17
Gas Boats	1	10				11
Chinese Contract	30	50	42			122
Reduction Plant						
Total	47	61	42			150

BOATS FISHED	White	Japanese	Indian	Number of Boats Fished
Gill Net (Cannery)				
Gill Net (Independent)	25	56	3	84
Seine	13			13
Total	38	56	3	97

第1図　アングロ・ブリティッシュ・コロンビア缶詰社の報告書（一部）
—Vancouver City Archives 所蔵

(Indian)・フィリピン人（Filipino）の記載順とその人数からは、サケ缶詰産業の労働構造が考察できる。特に、フィリピン人の記載は、米西戦争（1898年）後にフィリピンがアメリカの植民地となったため、当地から北米大陸への移住者が増えたことを示唆している。

下段には、当キャナリーの職種毎に出身国・民族別の雇用者が、恒常的な雇用と季節的なものとに大別されている。興味深いのは“Cannary”という職種で、これは頭部やヒレ類の形状から水揚げされたサケをピック（突棒）を使って魚種毎の選別を行う要職である[73]。また、おもに中国人が従事する缶詰作業を管理する“Chinese Contract”がある。春～秋季における季節的な缶詰作業の労働者を募集し、工場で指示を与える彼らは配下に約20人を監督した。これらの陸上における活動に対し、海上の漁撈活動も漁業種類毎に細分されている。それらをみると、Seine（巾着網漁業）は白人しか就かず、Gill Net（刺網漁業）では日本人が独占的に活躍していた。このような雇用システムが把握できる複数のRetuneの比較から、各地のキャナリーの傾向が見出される。カナダ北部のキャナリーではネイティブ・インディアンがChinese ContractやGill Netに就くことも少なくないのである[74]。

4　Debit（帳簿）とCheck（小切手）の活用

キャナリーをはじめ、そのほとんどの事業主はイギリス系のカナダ人である。彼らに雇用された

日本人には、賃金が支払われる。雇用主と被雇用者名、期限毎の支払金などが明記された当資料は、個人史を考察するには有益である。キャナリーには季節的に雇用された個々の漁業者の漁獲量の記録や、それに対する漁獲高が記されたDebit（帳簿）がある。日本では仕切書にあたる[75]この資料は、個人レベルの漁獲技量や漁場利用を知る手掛かりとなる[76]。

このようなDebitに類似する資料として、小切手（Check）がある。漁業者毎に集計されたDebitに対し、支払者・受取者やその金額と支払日が記されたCheckからは、漁撈以外の関連産業の様子も読みとれる。例えば、漁業者からの漁獲物を収集し、契約しているキャナリーへ運搬する集配者について知ることができる[77]。また、遠隔地のキャナリーや捕鯨基地に従事する日本人へ、日本の食材や生活用品を提供する同胞商人の活動も理解できる[78]。

5　旅券下附表の活用

海外へ渡航するとき、旅券が必要である。その下附表、つまり控えが外務省外交史料館に所蔵されている。制度によって書式は移り変わり、明治後期にほぼ整理された。都道府県毎に綴られた縦書のこの書類には、右側の最上段に記載期間、下段に都道府県名が示されている。この書類には、各年ごとの旅券取得者が「いろは」順に連記されている。各頁には上段から旅券番号・氏名・族称・身分・本籍地・年齢と旅行地名・旅行目的、そして下付月日が記されている[79]。まさにこの資料から、集落（ムラ）やイエレベルでの個人史が把握できる（第2図）。

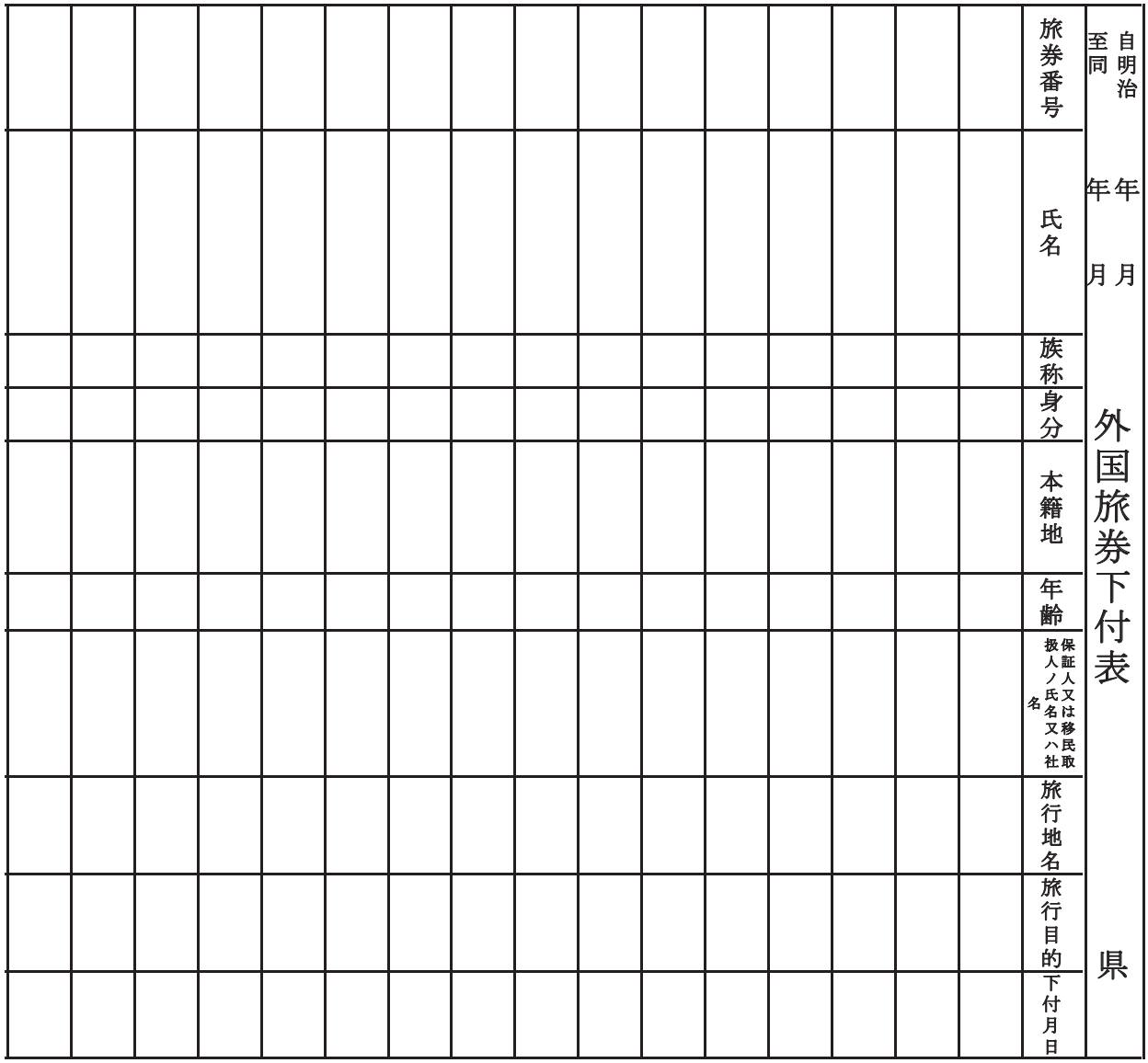
留意点として、「保証人又ハ移民取扱人ノ氏名又ハ社名」という項目がある。下段の旅行目的と関わって「保証人」からは先住者による呼び寄せ、「移民取扱人ノ氏名又ハ社名」からは契約移民会社による集団的な移住が読みとれる。後者の場合、『移民会社ヲ経由セル移民』[80]をはじめとする他の外務省資料との併用が有効である。ただし、「旅行目的」が一時的な商業視察や研学など、必ずしも移住にならないことに留意しなければならない。そして、下附表に記されたものの、実際には渡航していない事例も散見される。

6　戸籍関係の活用

個人レベルでの移住を知るには、戸籍関係の資料が最も重要である。当然のことながら、個人情報やプライバシーには、細心の注意を払わねばならない。しかし、親族をはじめとする関係者のご理解とご厚意によって閲覧が可能になると、かかる資料は渡航やその後の移動を知る手掛かりを与えてくれる。電子化される以前の戸籍謄本には右端の上段に本籍地、下段に前戸主が記されている。下段には右から順に戸主、父、母や兄弟姉妹などが左方へ書き加えられ、それぞれの出生年や続柄が示されている。重要なのは、上段に順次書きつづられる事由である。例えば、鹿児島県の某家六男の戸籍には以下のようにある。

【資料】
□□□□□婚姻西暦千九百壱拾九年六月弐拾壹日
英領加奈陀身分取扱使　エッチイーヤング婚姻證書作成右謄本提出
大正九年弐月弐日　同国駐在領事浮田郷次　受付同年六月弐拾四日送付

ここからは某氏が1919（大正8）年に□□□□□とカナダで結婚したことがわかり、続く記載から



第２図　旅券下附表の雛形―外務省外交史料館資料より作成

は彼女の出身地も判明する。その他、出生・死亡地に関する記述から、当人ならびに両親をはじめとする血縁関係者の居住地がわかる。それらを順次読解していくと血縁関係者の渡航、さらに子の誕生地の記載からは、家族の移動歴が理解できる。

Ⅴ．カナダ日本人水産移民史の研究目的－おわりにかえて－

カナダ日本人移民史研究において、個人史から検討するには他にも様々な資料がある。例えば、位牌や墓石などからも渡航先を知り得る。渡加前、または功を奏した後の寄進物も看過できない。カナダでの生業が具体的に看取できる古写真の活用も忘れてはならない。とりわけ、可視化の困難な漁場利用については稀有な古写真の発見と、それをもとにした聞き取り調査は、先述した漁業地理学の研究方法にも一石を投じる[81)]。

本稿では、北米への日本人移民史をめぐる先行研究とその方法を概観し、歴史地理学的研究の特

徴を考察した。とりわけ、漁業に関わる「水産移民」の独自性と、それに関わるアプローチを検討した。それらをふまえた筆者の研究の独自性は、次のようになる。

①カナダ日本人移民史の特徴として、自由移民としてサケ缶詰産業を中心とする漁業に携わった日本人について検討する。ただし、漁業をめぐる生業と関連する他産業も含めた彼らを「水産移民」という枠組みで捉える。また、鉄道工夫をはじめとする契約移民から水産業への転向についても看過しない。

②歴史地理学からのアプローチを重視し、時間と空間のスケールに留意しながら、テーマに応じて「水産移民」を捉える。時間については歴史的な変化として1800年代末期から太平洋戦争勃発までの約50年を対象とし、世界レベルでの社会・経済的背景や、さまざまな技術革新による変化を考察する。空間スケールについては、出身地（送出地）と移住地（受容地）とを相互に考えねばならない。前者では先行研究にありがちな都道府県レベルではなく、集落単位で考察することに努める。さらに、イエやヒトのスケールでも検討し、単なるパイオニアの賞賛では留まらない検討を心がける。

③漁業をめぐる地理学の発展性をふまえ、陸上である漁村と海上の漁場とを相互補完的に考察する。前者では居住空間以外の漁業補助空間を検討する。その場合、他の民族との国際的分業による居住地の住み分けについて大縮尺図から検討する。後者では時間スケールとも関わった年周性や日周性から、漁場利用の生態を分析する。

④このような①～③の分析を行うにあたり、さまざまな資料の活用を試みる。文献史学が活用してきた外務省行政資料に留まらず、漁業に関する日本の農商務省やカナダ各地の文書館、ならびに個人家所蔵の在野の資料の活用に努める。

本稿では、太平洋戦争以前におけるカナダ日本人移民をめぐる歴史地理学的研究についてレビューした。そのとき、先行研究で取りあげられてきた多くのサケ缶詰産業だけでなく捕鯨業や塩ニシン製造業、さらには造船業も考察してきた筆者は、漁業移民ではなく「水産移民」として、カナダ日本人移民史を捉える必要性を提唱してきた。そして、水産移民を検討する場合の資料紹介とその歴史地理学的活用方法を論じた。紙幅の関係上、全ては取りあげなかったが、古写真や日記・手記は、検討が困難である漁場利用の復原に寄与できることは間違いない。また漁場利用に関わる個人レベルでの分析にあたって、漁船の詳相に留意したい。その場合、日本で作成されている『漁船原簿』に類する資料の歴史地理学的活用方法[82]は、カナダでも援用できる。カナダ運輸局（Department of Transport）が編集する “List of Vessels on the Registry Books of the Dominion of Canada” には船名、船主の居住地、建造年、登録港、船長やトン数などが記載され、これは日本での『漁船台帳』にあたる。

本稿ではいくつかの日本人移民史研究をレビューした。拙稿の北米における関連文献のレビュー[83]も合わせて、不充分なところは少なくない。かかる試行錯誤はあるものの、本編はカナダ日本人「水産移民史」研究の試金石でありたい。

［付記］
本稿は、2015-2019年度科学研究費基盤研究（C）「カナダ契約移民の輩出と渡航後の地域的展開をめぐる歴史地理学的研究」（代表・河原典史）の成果の一部です。

注

1）阪田安雄（1994）『移民研究の歴史的考察とその課題』、日本図書センター。
2）神繁司（2011）『移民ビブリオグラフィー－書誌でみる北米移民研究－』、クロスカルチャー出版。
3）①移民研究会編（2008）『日本の移民研究動向と文献目録 I －明治初期－ 1992 年 9 月－』、明石書店。②移民研究会編（2008）『日本の移民研究動向と文献目録 II － 1992 年 10 月－ 2005 年 9 月－』、明石書店。
4）日本移民学会編（2011）『移民研究と多文化共生』、御茶の水書房。
5）前掲 4)。
6）角井靖一（1935）『飛躍日本の移植民地理』、南光社。
7）矢ヶ崎典隆（1993）『移民農業－カリフォルニアの日本人移民社会－』、古今書院。
8）石川友紀（1997）『日本移民の地理学的研究－沖縄・広島・山口－』、榕樹書林。
9）杉浦直（2011）『エスニック地理学』、学術出版会。
10）①飯田耕二郎（2003）『ハワイ日系人の歴史地理』、ナカニシヤ出版。②飯田耕二郎（2013）『ホノルル日系人の歴史地理』、ナカニシヤ出版。
11）前掲 3）には、歴史地理学よりも歴史学や社会学的研究の方が多く紹介されている。
12）岡部牧夫（2002）『海を渡った日本人』、山川出版社。
13）①山元貴継（2003）「日本統治時代の朝鮮半島における日本本土出身者の展開－土地所有との関わりを中心に－」、歴史地理学、45（1）、3-19。②三木理史（2003）「農業移民に見る樺太と北海道－外地の実質性と形式性をめぐって－」、歴史地理学、45（1）、20-36。③飯田耕二郎（2003）「戦前ハワイにおける日本人の職業と居住地・出身地分布」歴史地理学、45（1）、37-56。④矢ケ﨑典隆（2003）「カリフォルニアにおける日系移民の適応戦略と居住空間」、歴史地理学、45（1）、57-71。⑤石川友紀（2003）「南米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究－一世の地域的分布と職業構成を中心に－」、歴史地理学、45（1）、72-85。
14）木村健二（2003）「コメント植民地移住史研究の新たな方向－山元貴継・三木理史報告によせて－」、歴史地理学、45（1）、86-89。
15）山下清海（2003）「コメント移民研究における地理学的研究の特色と課題－椿真智子・石川友紀報告に寄せて－」、歴史地理学、45（1）、98-100。
16）久武哲也（2003）「コメント移民の適応戦略とエスニック間の分業－飯田・矢ケ崎報告に寄せて－」、歴史地理学、45（1）、90-97。
17）杉浦直（2003）「総括　移民・植民の歴史地理－その論点と課題（シンポジウム総括にかえて）－」、歴史地理学、45（1）、111-117。
18）①河原典史（2018）「カナダへの移民」、日本移民学会編『日本人と海外移住－移民の歴史・現状・展望－』、明石書店、所収、99-117。②河原典史（2017）「初期の日本人移民－江州ソーミル、熊本ヤマ、死ぬよりましかなヘレン獲り－」、細川道久編著『カナダの歴史を知るための 50 章』、明石書店、300-305。
19）福武直（1953）『海外移民が母村に及ぼした影響－和歌山県日高郡三尾村実態調査－』、毎日新聞社人口問題調査会。
20）鶴見和子（1962）『ステブストン物語－世界のなかの日本人－』、中央公論社。
21）飯野正子（1997）『日系カナダ人の歴史』、東京大学出版会。
22）①新保満（1986）『カナダ日本人移民物語』、築地書館。②新保満（1996）『カナダ移民排斥史－日本の漁業移民－（新装版）』、未来社。③新保満（1996）『石をもて追わるるごとく』、御茶の水書房。
23）佐々木敏二（1999）『日本人カナダ移民史』、不二出版。
24）末永國紀（2010）『日系カナダ移民の社会史－太平洋を渡った近江商人の末裔たち－』、ミネルヴァ書房。
25）谷岡武雄（1964）「湖東移民村の地理的環境」、立命館大学人文科学研究所紀要、14、1-24。
26）山田千香子（2000）『カナダ日系社会の文化変容－「海を渡った日本の村」三世代の変遷－』、御茶の水書房。
27）①大島襄二（1985）「カナダ北西岸インディアンの生活－ポート・シンプソンの伝統的食糧－」、人文論究、35（3）、21-46。②大島襄二（1985）「スキーナ漁業とポート･エドワード」、関西学院史学、21、53-72。③大島襄二（1985）「魚が綴るカナダの歴史－大西洋と太平洋の漁民たち－」、季刊民族学、9（2）、40-51。

④大島襄二（1987）「タラの文化とサケの文化－カナダ両岸の漁業－」、日本カナダ学会編集『カナダ研究の諸問題日本カナダ学会創立 10 周年記念論文集』、日本カナダ学会、434。

28）①岩崎健吉（1936）「紀伊半島南海岸に於ける海外出稼移民の研究（第 1 報）」、地理学評論、12（7）、589-611。②岩崎健吉（1937）「紀伊半島南海岸に於ける海外出稼移民の研究（第 2 報）」、地理学評論、13（3）、183-200。③岩崎健吉（1938）「紀伊半島南海岸に於ける海外出稼移民の研究（第 3 報）」、地理学評論、14（4）、302-320。

29）久原脩司（1983）「アラフラ海における採貝出稼初期移民の研究－和歌山県人を中心として－」、大島譲二編『トレス海峡の人々－その地理学的・民族学的研究－』、古今書院、532-546。

30）今野裕子（2015）「和歌山県太地とカリフォルニア州ターミナル島をつなぐ同郷ネットワーク」、米山裕・河原典史編『日本人の国際移動と太平洋世界－日系移民の近現代史－』、文理閣、所収、163-189。

31）和歌山県（1957）『和歌山県移民史』、和歌山県。

32）美浜町史編集委員会編（1984）『美浜町史』、美浜町。

33）カナダ移住百年誌編集委員会編（1989）『カナダ移住百年誌』、美浜町カナダ移住 100 周年記念事業実行委員会。

34）①彦根市（1987）『彦根市史』、博文堂。②彦根市史編集委員会編（2009）「新修彦根市史通史編近代第 3 巻」、彦根市。

35）広島県（1993）『広島県移住史通史編』、広島県。

36）①石川友紀（2009）「日本における出移民研究史概観－ 1990 年代以降－」、JICA 横浜海外移住資料館研究紀要、3、1-14。②石川友紀（2010）「九州福岡・佐賀・長崎・熊本 4 県の移民資料調査報告」、JICA 横浜海外移住資料館研究紀要、4、31-38。③石川友紀（2003）「南米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究－一世の地域的分布と職業構成を中心に－」、歴史地理学、45（1）、72-85。

37）原口邦紘（2010）「移民研究と史料－鹿児島県の場合－」、JICA 横浜海外移住資料館研究紀要、4、39-52。

38）例えば、以下のものがあげられる。①小野寺寛一（1996）『カナダへ渡った東北の村－移民百年と国際交流』、耕風社。②中村長助伝編纂委員会（1981）『カナダにかけた青春－中村長助たくましく生きてきた 50 年－』、宝文堂。③ミチコ・ミッヂ・アユカワ著・和泉真澄訳（2012）『カナダへ渡った広島移民－移住の始まりから真珠湾攻撃前夜まで－』、明石書店。④松宮哲（2017）『松宮商店とバンクーバー朝日軍－カナダ移民の足跡－』、松宮哲（自費出版）。

39）河原典史（2018）「カナダ日本人漁業史研究をめぐる展望と課題－近年における北米の成果を中心に－」、立命館文学、656、121-135。

40）代表的なものとして、①吉田敬市（1954）『朝鮮水産開発史』、朝水会。②古田悦造（1996）『近世魚肥流通の地域的展開』、古今書院。③神谷丹路（2018）『近代日本漁民の朝鮮出漁－朝鮮南部の漁業根拠地長承浦・羅老島・方魚津を中心に－』、新幹社。

41）代表的なものとして、①平岡昭利（2012）『アホウドリと「帝国」日本の拡大－南洋の島々への進出から侵略へ－』、明石書店。②伊藤康宏・片岡千賀之・小岩信竹・中居裕（2016）『帝国日本の漁業と漁業政策』、北斗書房。

42）代表的なものとして、①前掲 10）。小川真和子（2017）『海の民のハワイ－ハワイの水産業を開拓した日本人の社会史－』、人文書院。

43）代表的なものとして、島田正彦（1997）『未知の大陸を求めて－発見航海の地理と歴史－』、大明堂。

44）大島襄二（1983）『トレス海峡の人々－その地理学的・民族学的研究－』、古今書院。

45）先にレビューされたものとして飯野や Shibata, Y. があげられる。前者ではカナダの行政文書からみた政治・経済史的研究、後者ではカナダで発行された貴重な一次資料の紹介が特徴である。①前掲 21）。② Shibata, Y.（1977）The Forgotten History of the Japanese-Canadian. Volume1, New Sun Books.

46）①河原典史（2012）「20 世紀初頭のカナダ西岸における捕鯨業と日本人移民」、地域漁業研究 52（2）、65-83。②河原典史（2014）「カナダへ雄飛した臼杵のひと－小坂家の移住史－」、臼杵史談、104、59-77。

47）①河原典史（2015）「太平洋をめぐるニシンと日本人－第二次大戦以前におけるカナダ西岸の塩ニシン製造業－」、米山裕・河原典史編『日本人の国際移動と太平洋世界－日系移民の近現代史－』、文理閣、所収、146-162。②河原典史（2016）「20 世紀初頭のカナダ西岸における塩ニシン製造業の歴史地理学的検討

－是永・嘉祥家を中心に－」、立命館文学、645、370-353。③河原典史（2017）「サケを運んだ薩摩人－カナダのサケ缶詰工場における日本人移民史－」、立命館文学、650、123-138。

48）河原典史（2003）「第二次世界大戦以前のカナダ西岸における日系造船業の展開－和歌山県出身の船大工のライフヒストリーから－」、立命館言語文化研究、17（1）、59-74。

49）前掲 39）。

50）例えば、坂口満宏（2010）「誰が移民を送り出したのか－環太平洋における日本人の国際移動･概観－」、立命館言語文化研究、21（4）、53-66。

51）ただし、「カナダ日本人移民の父」と呼ばれる和歌山県三尾出身の工野儀兵衛に関する西浜久計の詳細な検討は、評価すべきである。西浜久計（1993）「カナダの父 工野儀兵衛」、移住研究、30、170-184。

52）田和正孝（1997）『漁場利用の生態－人文地理学的考察－』、九州大学出版会。

53）①花木宏直（2010）「大正期～昭和初期の芸予諸島・大三島におけるマニラ移民と国内出稼ぎの特性－旧岡山村口総地区を事例として」、人文地理、62（5）、401-425。②花木宏直（2012）「明治･大正期の神奈川県足柄下郡における渡航者の送出経緯と渡航後の行動」、歴史地理学、54（4）、4-23。③花木宏直（2013）「明治中～後期の沖縄県における移民会社業務代理人の経歴と属性」、沖縄地理、13、1-16。④花木宏直（2014）「東洋移民業務代理人･肥後孫左衛門の経歴と明治中～後期の沖縄県における海外移民の斡旋」、琉球大学教育学部紀要、84、69-81。⑤花木宏直（2017）「移民資料としてみた府県統計書の特性とその活用」、移民研究、13、1-22。

54）鈴木修斗（2018）「代期の福島県における海外移民送出の展開と帰国後の動向－安達郡石井村のフィリピン移民を事例として－」、歴史地理学、60（2）、1-22。

55）河原典史（1999）「漁村空間の構成に関する地理学的研究に関する一試論－地籍図と家屋台帳の利用をめぐって－」、桑原公徳編著『歴史地理学と地籍図』、ナカニシヤ出版、159-174

56）河原典史（2001）「漁業をめぐる空間利用－漁民のまなざしから－」、吉越昭久編『人間活動と環境変化』、古今書院、217-231。

57）①河原典史（2007）「資料調査－火災保険地図の歴史地理学的活用－」、立命館言語文化研究、18（4）、145-147。②河原典史（2008）「『BC 州サケ缶詰工場地図集成』にみるサケ缶詰産業と日本人漁業者」、立命館言語文化研究、19（4）、246-250。③河原典史（2014）「カナダ日本人移民史研究における住所氏名録と火災保険図の歴史地理学的活用－ライフヒストリー研究への試的アプローチ－」、移民研究年報、20、17-37。

58）①前掲 52）。②東幸代（2019）、「漁場利用をめぐる文献史学からのアプローチ－末田智樹報告・服部亜由未報告によせて－」、歴史地理学、61（1）、32-35。

59）代表的なものに、①松本博之（2003）「オーストラリア・トレス海峡諸島における先住民の Seascape」、奈良女子大学文学部研究年報、47、99-118。②松本博之（2013）「オーストラリア熱帯海域における真珠貝漁業の Seascape －トレス海峡・木曜島を中心に－」、地理学報、37、59-76。がある。他にも、③松本博之・城谷勇（2010）「トレス海峡における真珠貝漁業補遺－魚場図を中心に－」、奈良女子大学地理学・地域環境学研究報告、7、31-42。④松本博之（1981）「トレスの人と人と」、季刊民族学、15、88-95。⑤松本博之（1997）「「潮時」の風景－自然と身体－」、地理学報、32、25-59。⑥松本博之（2003）「先住民の海洋資源利用と国民国家の管理－オーストラリア・トレス海峡諸島民のジュゴン猟を事例として－」、国立民族学博物館調査報告、46、299-343。がある。

60）なお、生態学的な田和の漁業地理学研究は藪内芳彦によるところが大きい。また、近年では前田が漁場利用の地理学的研究を発展させている。①前掲 52）。②藪内芳彦（1958）『漁村の生態－人文地理学的立場－』、古今書院。③前田竜孝（2019）「日本の漁業地理学における生態学的方法の系譜とその展開」、地理科学、74（1）、23-39。

61）河原典史（2013）「カナダ･フレーザー川における日本人漁業者の漁場利用－日記と視察報告書から－」、国際常民文化研究叢書、1、185-193。

62）河原典史（2006）「日系カナダ移民のライフヒストリーをめぐる調査法の再考－実証的な生業研究にむけて－」、立命館言語文化研究、17（4）、3-20。

63）大日本水産会（1982）『大日本水産会百年史』、大日本水産会。

64）農商務省水産局（1918）『海外ニ於ケル本邦人ノ漁業状況』、農商務省水産局。

65）農商務省水産講習会（1919）『加奈陀太平洋岸鰊・大鮮漁業調査報告』、農商務省水産講習会。
66）河原典史編著（2011）「『前川家コレクション』にみる女性と子供たち－カナダ・バンクーバー島の日本人－」、京都民俗、28、111-130。
67）ニシン漁業については、大阪府貝塚の嘉祥家コレクションの古写真を活用した。河原典史（2013）「1920年頃のカナダ・バンクーバー島西岸におけるニシン漁業の漁場利用－調査報告書と古写真から－」、国際常民文化研究叢書、1、173-184。
68）佐々木敏二（1974）『山本宣治』、汐文社。
69）佐々木敏二・小田切明徳編（1977）『山本宣治全集：第6巻－日記・書簡集－』、汐文社。
70）前掲61）。
71）前掲57）。
72）河原典史（2009）「Returns（報告書）とDebits（個人別帳簿）にみるサケ缶詰産業と日本人漁業者」、立命館言語文化研究、20（4）、81-86。
73）前掲62）。
74）前掲72）。
75）前掲52）。
76）①前掲47）-③。②前掲72）。
77）前掲47）-③。
78）前掲46）-①。
79）族称とは士族や平民など、当時の身分。身分には戸主や戸主名に続く族柄が記入される。本籍地は集落の番地まで、年齢は月単位で記されている。
80）拙稿では、東京移民合資会社によるカナダ契約移民について考察した。①河原典史（2014）「カナダ･ロジャーズ峠における雪崩災害と日本人労働者－忘れられたカナダ日本人移民史－」、吉越昭久編『災害の地理学』、文理閣、所収、193-210。②河原典史（2016）「1910年の悲劇はいかに報道されたか－カナダ･ロジャーズ峠の雪崩災害と日本人移民社会－」、河原典史・日比嘉高編『メディア－移民をつなぐ、移民がつなぐ－』、クロスカルチャー出版、所収、131-156。
81）筆者は前掲66）・67）の他、二世の子供たちの記録写真も復刻・解題している。河原典史（2017）『カナダ日本人移民の子供たち－東宮殿下御渡欧記念・邦人児童写真帖－』、三人社。
82）河原典史（1997）「泉佐野市をとりまく漁船の流通形態－「漁船原簿」の地理学的分析の試み－」、泉佐野市史研究、3、66-79。
83）前掲39）。

（本学文学部教授）

The Japanese Canadian Fishermen History of Immigration Study and the Problem in the Historical Geography

by
Norifumi Kawahara

This article is the method with a precedent study over the history of Japanese immigration to the North America, and this report examines the characteristic of the study of the historical geography. In particular, it is examined the uniqueness and the approaches of “fisheries immigrants” Based on these, the uniqueness of the author’s research is as follows.

①About a feature of Japanese Canadian immigration history, the author examines the Japanese who have been involved in the salmon canning industry as free immigrants. And then, in terms of their involvement in fisheries and their livelihoods, they capture them, including other related industries, in the framework of fishery immigrants. The author also considers switching from contract immigration to the fishing industry, including railway laborers.

②The author focuses on approach from historical geography and arrest "a fisheries emigrant" depending on a theme while noting a scale of the time and space. The subject of the study is about 50 years from the end of the 1800s to the outbreak of the Pacific War, and the world's social and economic background and changes due to various technological innovations are considered. The author tries to consider the place of birth at the village level, not at the prefectural level, and in addition, considers the scale of the house and the human, and to go beyond mere pioneer praise.

③The author considers the fishing villages on land and the fishing grounds at sea in a complementary manner. In the former case, it is important to consider a fishing auxiliary space other than the living space. In that case, the separation of settlements by division of labor with other ethnic groups is examined from a large scale map. In the latter, the ecology of fishery use is analyzed based on the perennial and diurnal aspects related to the time scale.

④In conducting these three analyses, it is important to utilize various materials. In addition to the administrative materials used in literature history, the author strives to utilize materials in archives and private homes in Japan and Canada.